

二〇二二年一月二六日

金髪の彼が代継よ松手入
小流れの落葉まぎれに稚魚の影
小春日やりハビリ兼ねて廻り道
耳遠き二人肩寄せ小六月
手マスクに小さき咳や四人部屋
緋毛氈床几かつ散る紅葉よし
白雲のゆっくり過ぎる冬木立

二〇二二年一月二五日

雪囲ひ砦となせる合掌家
残像に白き手袋憂国忌
ウインドー見て着膨れの背を伸ばす
秋耕の吾へエールや鳶の笛
滑り台逆登る児ら寒風裡
ビル風にロンド舞ひせる落葉かな

二〇二二年一月二四日

枯蓮くの字くの字に凭れあひ
湯豆腐の湯気立つ先の笑顔かな
裏参道彩を重ねて散紅葉
能登岬海の果てより冬来る
孫に説く紅葉の科学さんぽ道
野地藏に蓑笠着せて冬支度
園児らが育みたりし賞の菊
朝市の姥と掛け合ふ蕪漬

こすもす

智恵子

満天

なつき

むべ

凡士

ぼんこ

凡士

もとこ

満天

千鶴

うつき

凡士

素秀

みきお

もとこ

凡士

あひる

智恵子

せつ子

凡士

湖涸れてあらはとなるや穴太積

よく肥えし赤子の笑まふ小春かな

二〇二二年一月二三日

虫喰ひが画材によしと柿落葉

山城の天守が浮ぶ冬霞

大公孫樹天を突くやに黄落す

露天湯へ寒灯頼む磴の径

世俗には染まらぬ決意冬薔薇

推敲に推敲かさね日短し

老猫のつづらまなこに日向ぼこ

二〇二二年一月二二日

針山のごと茅葺を挿す落葉

冬山の馬の背なせて雲の影

朝刊にどさとチラシや師走来る

二〇二二年一月二二日

ベランダにデートすふくら雀かな

とびとびに池塘縁どる石路黄なり

夕映へや車窓に展ぐ牡蠣筏

隆松

なつき

凡士

素秀

満天

凡士

もとこ

せつ子

みきお

素秀

せつ子

満天

あひる

せいじ

あひる

せいじ

せいじ

凡士

凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年一月二八日